

## 横井小楠の人と思想 佐久間象山に学ぶ 読書感想文

2020年10月20日

### 1. 著者紹介 田口佳史氏

昭和17年東京生まれ。昭和47年株式会社イメージプラン創業。以来30数年2000社に渡る企業変革指導を行う。中国古典思想研究四十数年。永年にわたり研鑽された中国古典を基盤としたリーダー指導は多くの経営者と政治家を育てた。東洋倫理学、東洋リーダーシップ論の第一人者。企業、官公庁、地方自治体、教育機関など全国各地で講演講義を続け、1万人を超える社会人教育の実績がある。平成10年 老荘思想的経営論「タオ・マネジメント」を発表。米国でも英語版が発刊され、東洋思想と西洋先端技法との融合による新しい経営思想として注目される

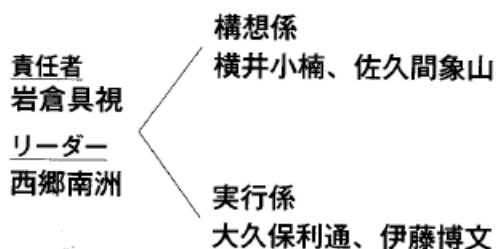


### 2. 本書のキーワード（抜粋）

#### 1) 全体論 “佐久間象山に学ぶ”より

『明治新政府の理想的布陣としては、下図5ようになるべきだったと思う。新しい国家には、何と言っても国家構想が必要で、その任に当たる構想係としては、横井小楠と佐久間象山。その構想を実施実行する実行係は、伊藤博文と大久保利通。これらのまとめ役として西郷南洲。全体を束ねるのが岩倉具視というのが新国家中枢の顔触れである。

明治大転換推進の構図



しかし残念ながら、佐久間象山は維新の四年前、横井小楠は維新の翌年（といっても明治元年は慶応四年九月八日であるから四ヶ月余りしかない）に、二人とも京の都で通行中を暗殺されてしまう。つまり構想係が二人とも突然いなくなってしまったのだ。困った岩倉は、底力を発揮する。さすがに策謀に長けた公家だけのことはある。万事に窮することがない。西洋列強の真似をすればいい。よく言えば、先進諸国の先進性を何もかも全て積極的に、もっと言えば我武者羅に取り入れることだとした。その為には、。百聞は一見に如かず”で直接見て廻ろうということになり、「岩倉遣米欧使節

団」となる。何と新政府の中枢の人々が明治四年十一月から明治六年九月まで、約一年十ヵ月もの間国家を留守にして見聞回覧したのである。』

## 2) 横井小楠について

『堯舜三代の治政への復帰 世界一等の仁義の国となり天に代わって世界の民の為に働き世界の世話やき国家となって大義を世界に広める』

『「道というものは天下に行き渡っているものだから、わが国のもの、外国のものということはありません。道の有る所は野蛮な国といわれても世界の中心になるべき先進国で、もし道がなければ、日本や中国といえども野蛮な国といわれても仕様がありません。初めから野蛮、先進という区分があるわけではありません。……したがって日本に仁義の大道を起こして、強国にしないでなりません。この有道ということを明確にして、世界の世話やき国家にならねばならないのです。一発の砲弾で一万、二万の人々が戦死するというようなこと(戦争)は止めさせなければなりません。そこでわが日本はインドのような植民地になるか、世界の中で第一等の仁義の国になるか二つに一つの選択を迫られているのです』

『わが国日本には、「儒教・仏教・道教・禅仏教・神道」という思想哲学の蓄積がある。こんな思想哲学の集積地は世界広しといえども、他にはない。つまりこれは、「心徳の学」の伝統がある国なのである。この精神文化的土壌こそが日本の特性であり、いまこそこの特性を認識して土台とし、その上に先端的西洋技術を駆使して「堯舜三代の治政」を行い、その成果を世界に提供することをやれば、戦争をなくすこと横井が常々いっている「人情があるか」こそが政治の要点、交易で外国と取引する決め手だと強調していることが、よく理解できるのである。このように「政治に人情があるか」という問題は、政治にとってとても重要なのだが、人情を感じる政治など、とても少ない。それは為政者が真に民の暮しに寄り添っていない。民に寄り添うとは、どのようなことなのか、ここの横井の政策に学ぶべきである。

## 3) 佐久間象山

『象山ほど、正当に、本質的に科学技術を見詰め、人間がいかに主導権をもって技術を扱うべきかを主張した人はいない。

科学技術は一部の権力者のものでもないし、専門家のものでもない。広く一般の市民のものである。』

『何と言っても東洋は原理原則に秀でている。それに対し西洋は技術、つまり具体的な物品にしてしまう能力には長けている。しかし、どうだろうか。原理原則があって、初めて技術はある。つまり、「人間の幸せ、より良い人生」というこの世の原理原則があって、初めて技術が活かされる。ヴィジョンがあって初めてその実現の為に技術の意義が出てくるというもの。こういう社会でありたい、という構想があって、次に技術の出番となるのである。技術が先行し、こういうことが出来る、こうも可能、ということが

先にあつて、理屈が後追いでは、真に技術は活かされない。それでは技術力が発揮出来ないと見通したのである。』

#### 『佐久間象山に学ぶ』

1. 柔らかい頭脳と豊かな想像力を持つ
2. 柔らかい頭脳と豊かな想像力を持つ
3. 相手の強味で相手を倒せ
4. 転換期の要注意点はここだ
  - ① 技術は精神があつて初めて有効になる
  - ② 特にいま重要なこと
  - ③ 信じたことは一人でもやる
  - ④ 非常時に強くて初めて名リーダー
  - ⑤ 理論はやってみて初めて解る
  - ⑥ やっぱり人材に尽きる
  - ⑦ 象山の残してくれたもの』

#### 5. 感想文

2020年の今、世界や日本はコロナ渦という第二次世界大戦以来の苦難を迎えており、全てにおいて大きな転換期を迎えている。そんな時だからこそ、日本は世界のために日本人としての資質を活かし、率先して方向性を示すべきである。

日本には、明治維新という大転換期初期に推進構想係という2人の偉人がいた。残念ながら、道半ばにして2人は暗殺されてしまった。

##### ◆横井小楠

- ・幕末に日本をデザインした男
- ・現代日本の進むべき道を150年前に示した男がいた

##### ●佐久間象山

- ・松陰、龍馬、海舟が師と仰いだ
- ・幕末に科学技術を立国を目指した男

先ず、悔やまれるのは明治の大転換に構想係のお二人がいなかったことである。しかし、お二人の下記基本思想は現在の日本に絶対に活かせると切に思う。

- ◆世界一等の仁義の国となり天に代わって世界の民の為に働き世界の世話やき国家となって大義を世界に広める。
- ◆わが国日本には、「儒教・仏教・道教・禅仏教・神道」という思想哲学の蓄積がある。こんな思想哲学の集積地は世界広しといえども、他にはない。つまりこれは、「心徳の学」の伝統がある国なのである。
- 科学技術は、一部の権力者のものでもないし、専門家のものでもない。広く一般の市民のものである。
- 「人間の幸せ、より良い人生」というこの世の原理原則があつて、初めて技術が活かされる。ヴィジョンがあつて初めてその実現の為に技術の意義が出てくるといふもの。こういう社会でありたい、という構想があつて、次に技術の出番となるのである。